天王町村東遺跡

Tennōchō Murahigashi Site –The 1st excavation report–

—浜松市 天王町村東遺跡　第１次発掘調査報告書—

受付 第 14.6.4 号

2002年３月

（財）浜松市文化協会

The Association for Cultural Creation Hamamatsu City

例　言

1　本書は静岡県浜松市天王町における、天王町村東（てんのうちょうむらひがし）遺跡の発掘調査（平成14年2月12日付、教文第3-249号）にかかわる報告書である。

2　発掘調査は事業所（ＪＡとぴあ浜松長上支店）新築工事に先立ち実施した。発掘調査は事業者（とぴあ浜松農業共同組合）が財団法人浜松市文化協会に委託し、浜松市博物館が調査の指導にあたった。調査にかかわる費用は全額委託者が負担した。

3　当該地域の正式な発掘調査は今回が初めてであり、新たに遺跡名を付けた。調査地の小字名は「村東」であるが、同様の地名は市内に複数存在する。このため、町名を併記することとし、遺跡名称は「天王町村東遺跡」とした。

4　現地調査および整理作業は鈴木一有（浜松市博物館）が担当し、中村玲子（浜松市文化協会）、鈴井けい子、原田和子、峯野洋子、林至美が補佐した。報告書の執筆、写真撮影は鈴木が行った。

5　調査にかかわる諸記録および出土遺物は、浜松市博物館が保管している。

6　本書で用いる方位は真北を示す。標高は海抜である。方位は、調査地区の測量図を2500分の1地形図に合成して求めた。標高は2500分の1地形図に表記がある道路上の値（平成９年度版、笠井街道上、標高値8.1m）を基準にした。

7　本書で報告する土器の断面と、種別の関係は以下のとおりである。

□ 弥生土器･土師器　■ 須恵器　▒ 灰釉陶器･山茶碗

目　次

例　言

第１章　序　論

　1　調査経緯…… 2

　2　遺跡をとりまく環境…… 3

第２章　調査成果

　1　検出遺構…… 6

　2　出土遺物……10

　3　まとめ……12

図　版

報告書抄録

第１章
序　論

天王遺跡群は、天竜川平野の中央に位置する大規模な遺跡複合体である。天王町村東遺跡は、遺跡群が所在する地区の中心的宗教施設である大歳神社の旧境内にあり、何らかの遺構の存在が予想された。

1　調査経緯

遺跡の位置　天王町村東（てんのうちょうむらひがし）遺跡は、静岡県浜松市天王町に位置する（Fig.1）。天王町は天竜川が形成した沖積平野の中央に所在し、現在、主要幹線沿いに市街地化が急速に進行している。とくに、浜松市中心部から同市笠井地区に至る幹線道路である笠井街道沿いには商業店舗が密集しており、地上から遺跡の存在をうかがうことが困難な状況にある。

調査経過　天王町一帯は天王遺跡群と総称される広大な遺跡が埋没していると推定されている。今回調査した地点の南に所在する天王中野遺跡では、過去２回の発掘調査が実施され、弥生時代から中世に至る複合遺跡の詳細が明確にされている。しかし、広大な天王遺跡群にかかわる本格的な発掘調査は、天王中野遺跡の調査以後には行われておらず、遺構の広がりについては不明な点が多かった。

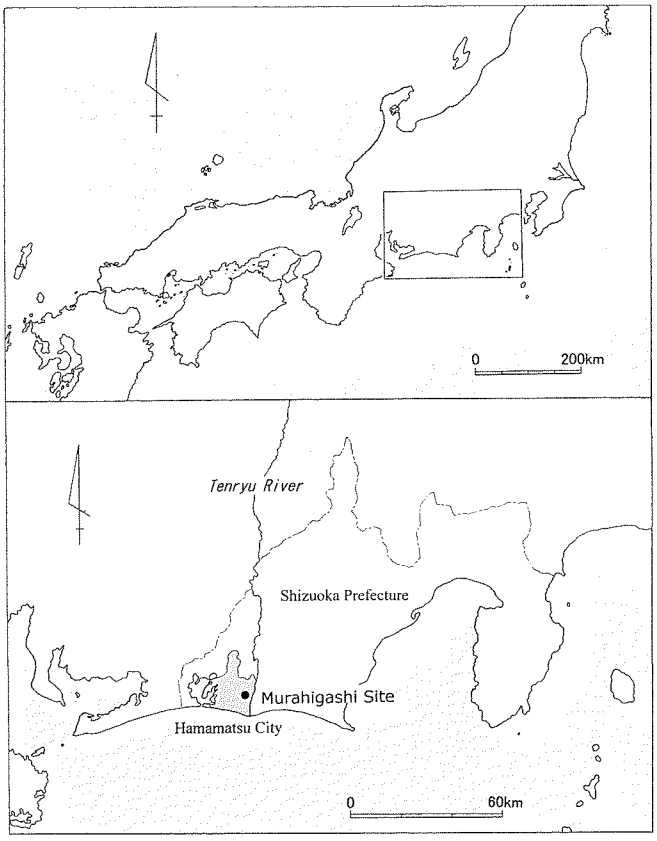


Fig.1　天王町村東遺跡の位置

2001年、天王中野遺跡の500m北側にあたるＪＡとぴあ浜松長上支店の新築建て替え工事が計画された。開発予定地は天王町の中心的な宗教施設である大歳神社の北側に隣接し、天王遺跡群にかかわる何らかの遺構が存在する可能性が考えられた。開発計画を受け、まず、試掘調査を実施して埋没する遺構群の詳細を探索した。試掘調査は４地点で実施したが、安定した遺構面は、開発予定地の東側にあたる区域に残存していることが確認できた。その後の協議を経て、開発予定地のうち東半分の区域に限定して、事前の発掘調査を実施することになった。

遺跡名称は、小字名をとって新たに天王町村東遺跡と命名した。発掘調査は2002年1月29日～31日に実施した。調査面積は170㎡である

2　遺跡をとりまく環境

（1）天王町村東遺跡の地理的環境

沖積平野の概況　天竜川の流路は三方原台地と磐田原台地の間において、絶え間ない変更を繰り返している。天竜川は支流が入り乱れた幾筋もの集合体として考えるほうが実態に近く、その痕跡は現在の小河川に引き継がれている。天王町の東側を流れる安間川は現在でも安定した水量を保ち、かつて天竜川の主要な流路の一つであったと考えられる。天王町村東遺跡は、天竜川（安間川）が形成した自然堤防上に立地しており、比較的安定した土地であった。

天王低地　天王町村東遺跡の西側には、南北約3km、東西約1.5kmにおよぶ氾濫平野が存在する。この低位面は、加藤芳郎によって「天王低地」と呼称され、氾濫平野としては天竜川流域で最大規模を誇る。加藤によると、天王低地の大部分は縄文時代まで水域であり、弥生時代になって泥土の堆積が進み水田として活用できるようになったという（箕輪遺跡報告参照）。

天王低地の北側中央には、弥生時代後期の集落である田見合遺跡が展開しており、この仮説を裏づける。田見合遺跡は比較的規模が大きい集落と考えられるので、弥生時代後期には天王低地の中の微高地上が居住域として用いられたようだ。天王町村東遺跡に居住した人々も、天王低地に水田を営んでいた可能性が高いだろう。

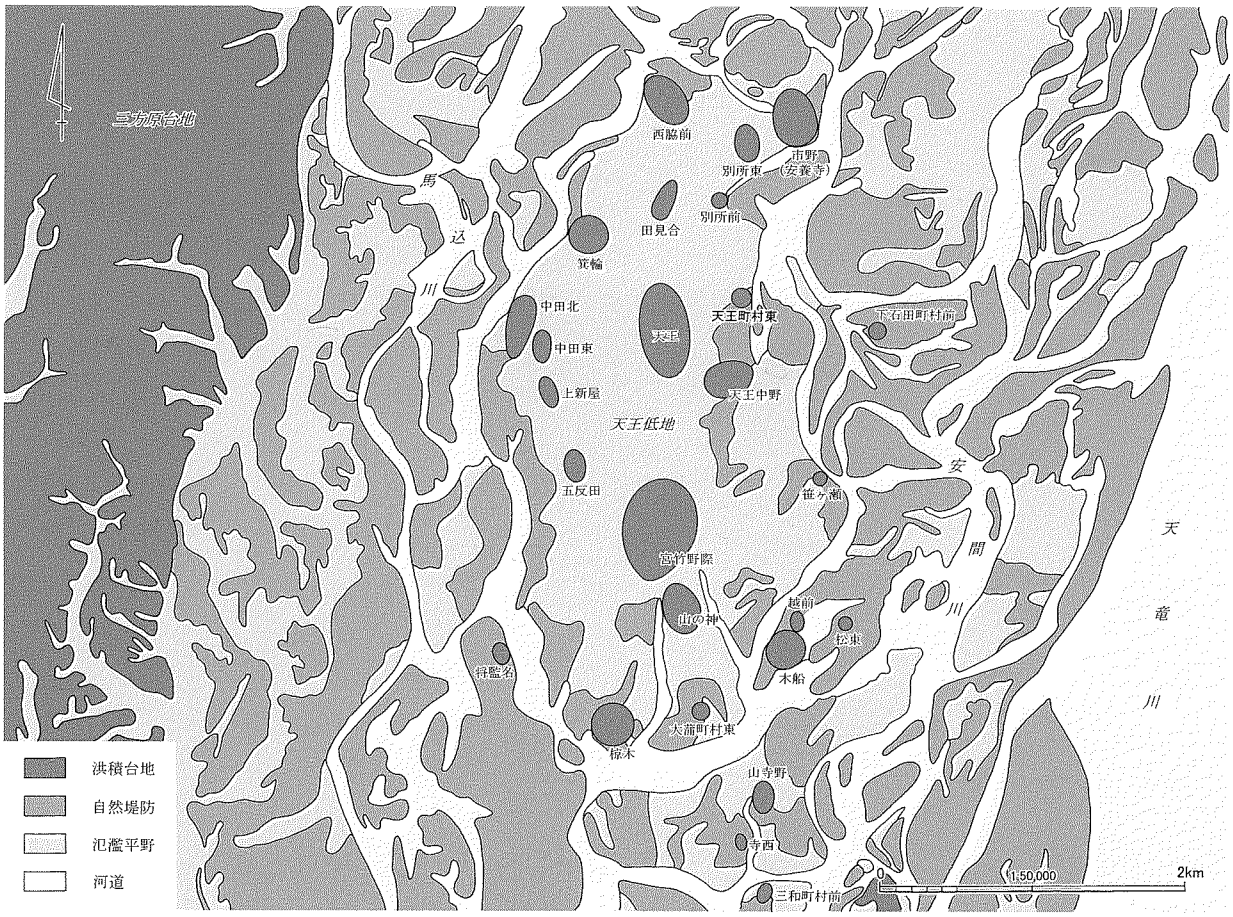


Fig.2　天王低地を中心とした自然地形と遺跡の立地

Tab.1　長上地区における主な遺物出土記録および発掘調査一覧

遺跡名	所在地	調査・出土時期	調査主体	主な時代	文　献
長上地区一帯（採集）		1950年代以前	［遺物採集］	弥生～鎌倉	長上郷土研1959
市野（安養寺）	市野町	1959.3	長上郷土研究会	弥生	長上郷土研1959
別所前（採集）	市野町	1977.3	［遺物採集］	弥生	浜松市2002
田見合（採集）	市野町	1982.4	［遺物採集］	弥生	鈴木1985
田見合（試掘）	市野町	2001.11	浜松市教育委員会	弥生	未報告
中田北（試掘）	中田町	2000.4	浜松市教育委員会	奈良～平安	未報告
箕輪	小池町	1992.8～1992.11	静岡県埋蔵文化財調査研究所	古墳～奈良	静岡県1994
天王中野1次	天王町	1977.4～1977.6	浜松市教育委員会	弥生・奈良	浜松市1981
天王中野2次	天王町	1995.12～1996.3	浜松市教育委員会	弥生・奈良	浜松市1997
天王中野（試掘）	天王町	2000	浜松市教育委員会	弥生・奈良	浜松市2002
天王町村東	天王町	2002.1	浜松市教育委員会	奈良～平安	浜松市2002

[文献]

長上郷土研1959	長上郷土研究会	1959	『長上郷土資料（二）　安養寺遺跡について』
浜松市1981	浜松市遺跡調査会	1981	『浜松市天王中野遺跡発掘調査報告書』
鈴木1985	鈴木範子	1985	「田見合遺跡の弥生土器」『転機』創刊号
静岡県1994	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	1994	『箕輪遺跡』
浜松市1997	(財)浜松市文化協会	1997	『天王中野遺跡2』
浜松市2002	(財)浜松市文化協会	2002	『天王町村東遺跡』（本書）

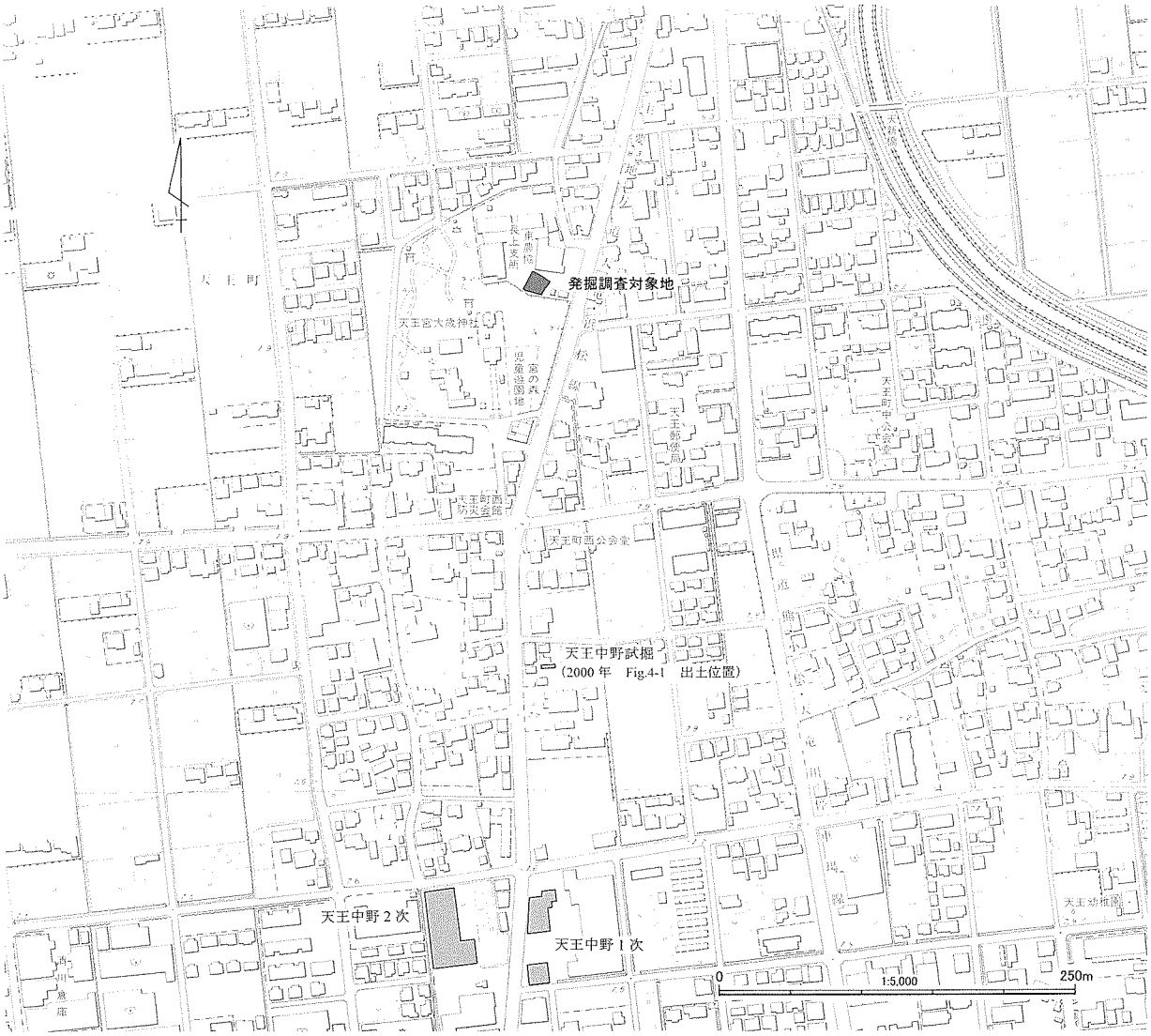


Fig.3　発掘調査地点とその周辺

（2）長上地区における歴史的環境

弥生時代　今回の調査では、中期前葉（丸子式）の土器片が出土した（Fig.9）。また、2000年に実施した天王中野遺跡の試掘調査で、Fig.4-1に示した中期後葉の土器片が出土している。さらに、天王町村東遺跡の北西750mに立地する田見合遺跡においても、中期中葉～後葉の土器が出土している。天王低地の北側に弥生時代中期の集落が埋没している可能性が高く、今後の詳細な調査が期待される。

弥生時代後期（山中式期から欠山式期）には、天竜川平野に立地する遺跡数が激増する。長上地区においても、天王中野、市野（安養寺）、田見合、箕輪などの各遺跡において、遺物の出土が知られる。箕輪遺跡においては同時代の水田が発掘調査されており、天王低地が広域に水田として利用されていた状況がうかがえる。弥生後期の出土遺物量は非常に多く、天王低地とその縁辺に居住した人口が格段に増加したことを物語る。なお、S字甕A類を含む遺物群が別所前遺跡から採集されている（Fig.4-2～5）。弥生時代から古墳時代への移行期にかけても長上地区に集落が残存していたことがうかがえる。

古墳時代　古墳時代前期になると長上地区では集落の様相が不明瞭になる。弥生時代後期にあった大規模な集落は解体し、集落規模が縮小すると推測される。古墳時代中期から後期の遺物は天王中野遺跡や箕輪遺跡で出土しているが、弥生時代後期と比べるとその数は少なく、具体的な集落景観は復元できない。

奈良～鎌倉時代　律令体制の確立により、静岡県西部地方は遠江国に編成される。長上地区はその名が示すように、長上郡（709年、長田郡が長上、長下の2郡に分割）に属した。天王中野遺跡は、奈良時代の主要な集落と考えられる。また、今回の調査によって、天王町村東遺跡にも、奈良～鎌倉時代にかけての居住域が展開していることが明確になった。この集落は天王中野遺跡と連続するのか、検討する余地がある。

室町時代以降　天王中野遺跡で典型的に示されるように、鎌倉時代の集落は14世紀になると廃絶している。天竜川平野では、14～15世紀頃に集落の移動が認められ、廃絶した集落はその後急速に島畑化が進行した。

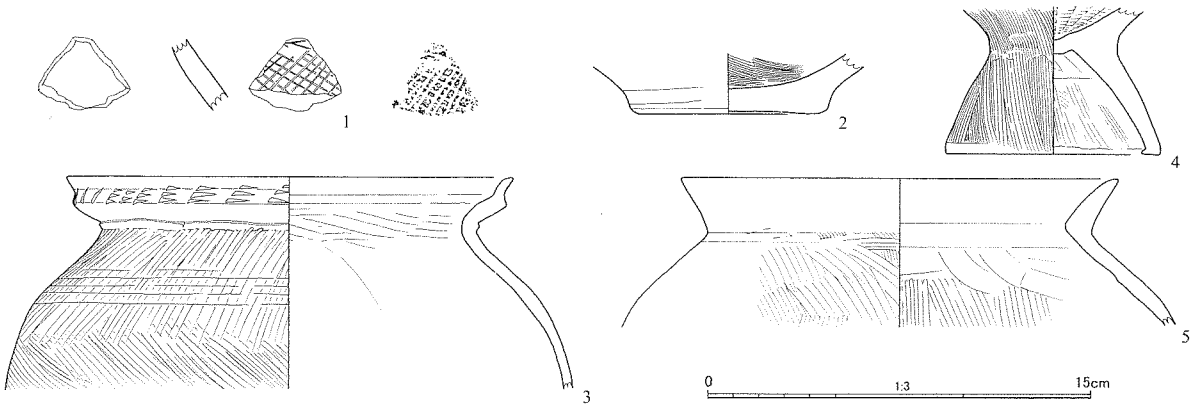


Fig.4　周辺遺跡出土遺物

1:天王中野遺跡（2000年試掘）　2～5:別所前遺跡（1977年採集）

第 2 章
調査成果

天王町村東遺跡には、奈良～平安時代の集落が埋没していることが判明した。検出した遺構としては、竪穴建物、井戸などが挙げられる。また、弥生時代中期前葉の遺構が存在する可能性も高い。

1　検出遺構

(1)　調査の概要

基本層位　天王町村東遺跡における堆積層位をFig.5に示す。基盤層としては緑灰色砂層（3層）が存在する。砂層は所々に礫層が帯状に貫入するところがあり、全体としても礫混じりの層位である。基盤層は、調査対象地においては、西に向かって低くなる傾向が認められた。自然堤防から、西に向かって展開する後背湿地（天王低地）に至る地形の傾向を反映していると考えられよう。基盤砂層の上には遺物包含層である暗茶褐色粘土（2層）が堆積している。

調査地区の設定　(Fig.5)　試掘調査により、基盤層の標高が高く、遺構が良好に残存するのは開発対象地の東側であることが判明した。この結果を受け、事業所新築予定地の東半分に限定して発掘調査を実施した。ただし、遺構の分布は必ずしも途切れることはない。今回の調査地区の周囲では、どの地点でも遺構が存在している可能性がある。

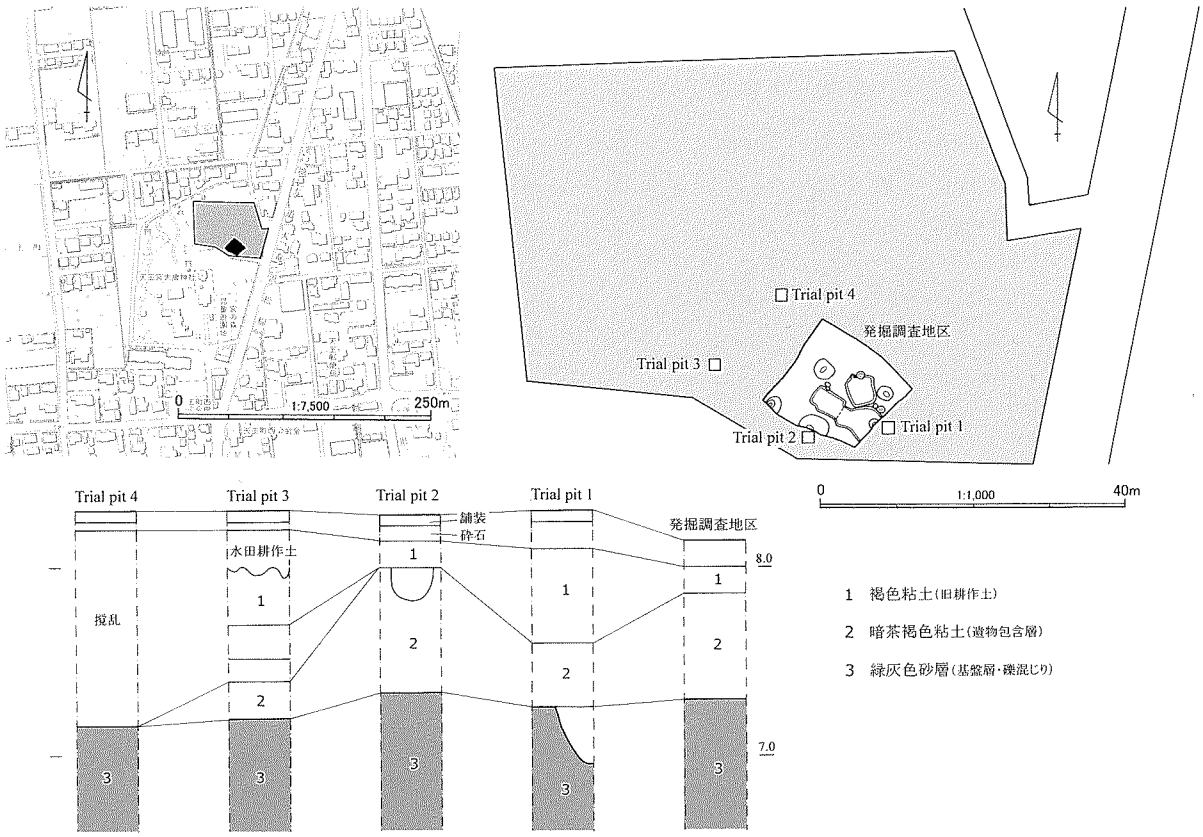
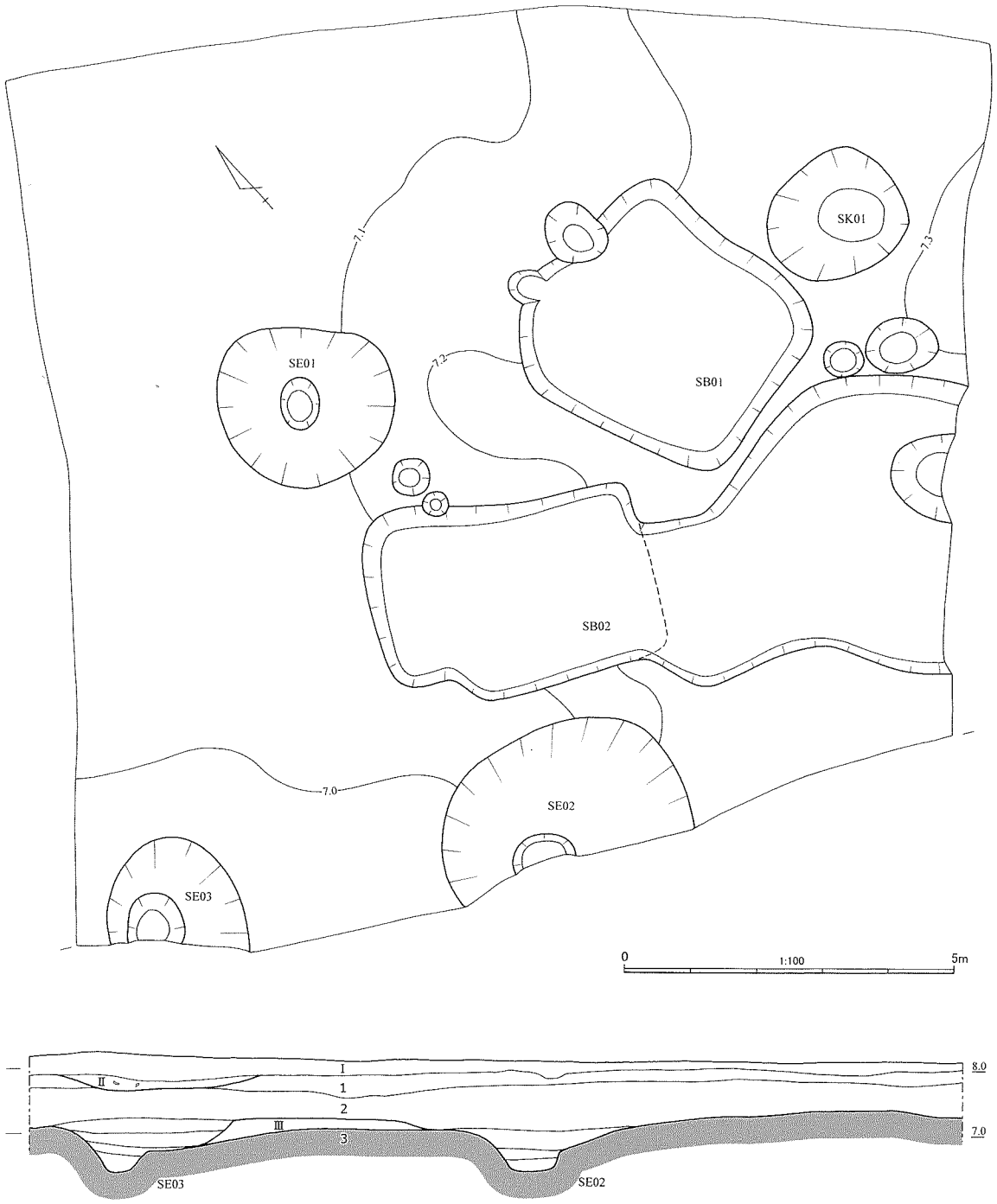


Fig.5　開発予定地の土層堆積状況



1 褐色粘土(旧耕作土)

2 暗茶褐色粘土(遺物包含層)

3 緑灰色砂層(基盤層・礫混じり)

I 淡褐色砂質土

II 黒褐色粘質土(近代の瓦を含む)

III 淡黄褐色粘土(基盤層)

Fig.6 検出遺構

(2) 検出遺構

概　要　検出した遺構は竪穴建物、井戸、土坑などである。遺構埋土は遺物包含層（2層）に良く似た暗茶褐色系の土であり識別は容易である。しかし、明確な遺構検出は、基盤層の凹凸が顕著であり比較的困難といえる。

竪穴建物や井戸は、奈良時代～平安時代（古代）のものと推定できる。また、竪穴建物の埋土中に、弥生時代中期の遺物が混入していた。古代の遺構群の下層に弥生時代の遺構が存在している可能性が高いが、今回の調査における諸条件の制約から、弥生時代の遺構を調査することはできなかった。

竪穴建物（SB01・02）　（Fig.7）　調査区の西側において、竪穴建物を検出した。SB01は、南に面する方形の平面をなし、南北3.6m、東西3.5m、検出面からの深さは15cmほどを測る。北側には竈の痕跡の可能性が高い土坑が2箇所存在する。ただし、これらの土坑には、粘土や焼土の遺存、炭化物の集積といった、積極的に火所と関連づけられる特徴は認められない。柱穴の痕跡も確認できなかった。

SB01からは、Fig.11-32～35に示す遺物が出土した。遺構の時期を明確にできるような資料といえないが、灰釉陶器の壷（35）の存在から、SB01は9～10世紀頃の遺構と推定できる。

西遠江においては、平安時代をつうじて竪穴建物は衰退傾向が強くなるが、その消滅過程は必ずしも明確にされているとはいえない。奈良時代の終り頃から平安時代にかけての竪穴建物は、下滝遺跡で検出された事例のように、①全体に小型化する、②平面形は方形を指向するが整っていない、③柱穴は明確でない、④竈の痕跡は不明瞭である、といった特徴が認められる。これらの諸属性はSB01のそれと一致し、遺構の帰属時期を判断する上で示唆的である。

SB01の西側で、さらに平面形が不明確な浅い竪穴状の遺構を検出した。遺構の平面形の傾向や遺構埋土の状態から、竪穴建物の可能性があると判断できる。この遺構をSB02（推定竪穴建物）とする。SB02からは、Fig.11-36～38の遺物が出土した。出土遺物には、13世紀後葉の山茶碗（38）が存在し、遺構の時期を決めることが困難である。38を混入品と評価すれば、SB01と近接した年代を想定することも許されようが、出土遺物が小破片であることから明言できない。

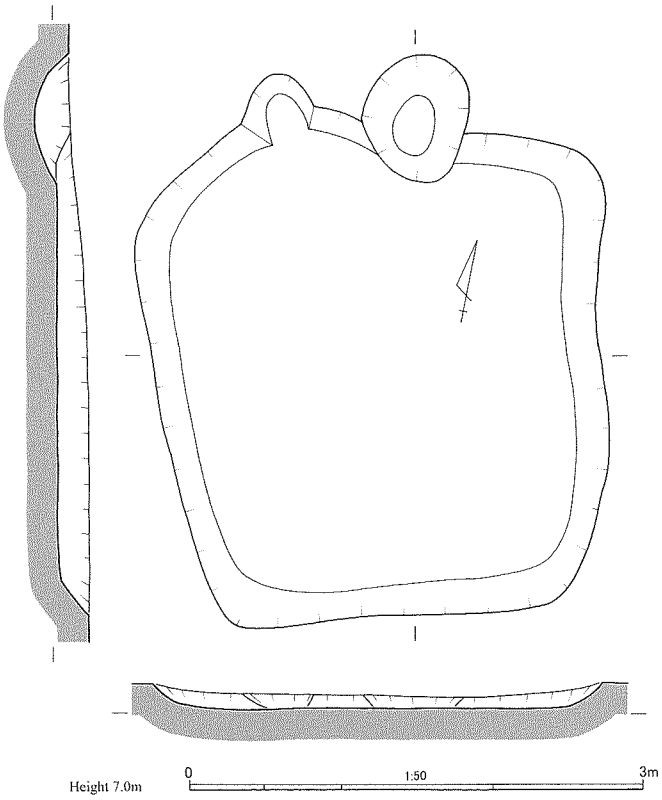


Fig.7　竪穴建物（SB01）実測図

井戸（SE01～03）　（Fig.8）　調査地区の西側において3基の井戸を検出した。いずれも、二段状をなす形態であり、井戸枠などはみられない。

SE01の埋土は数層に分けられるが、最上層（1層）の堆積前に、完形のかわらけ（Fig.10-30）が井戸の中央部に正位置で埋置された状況が検出できた。かわらけは井戸廃絶前の儀礼に用いられた可能性が高いだろう。SE01から出土した遺物はFig.10に示すように、比較的多い。遺物の時期は奈良時代から平安時代まで多岐にわたるが、Fig.10-28･29に示す12世紀中葉から後葉の遺物群がSE01の廃絶時期を示すと考えられる。

SE02･03は、調査区の境界で検出した井戸である。出土遺物はFig.11-39など極めて少ない。遺構の時期は奈良～平安時代であると推定できる。

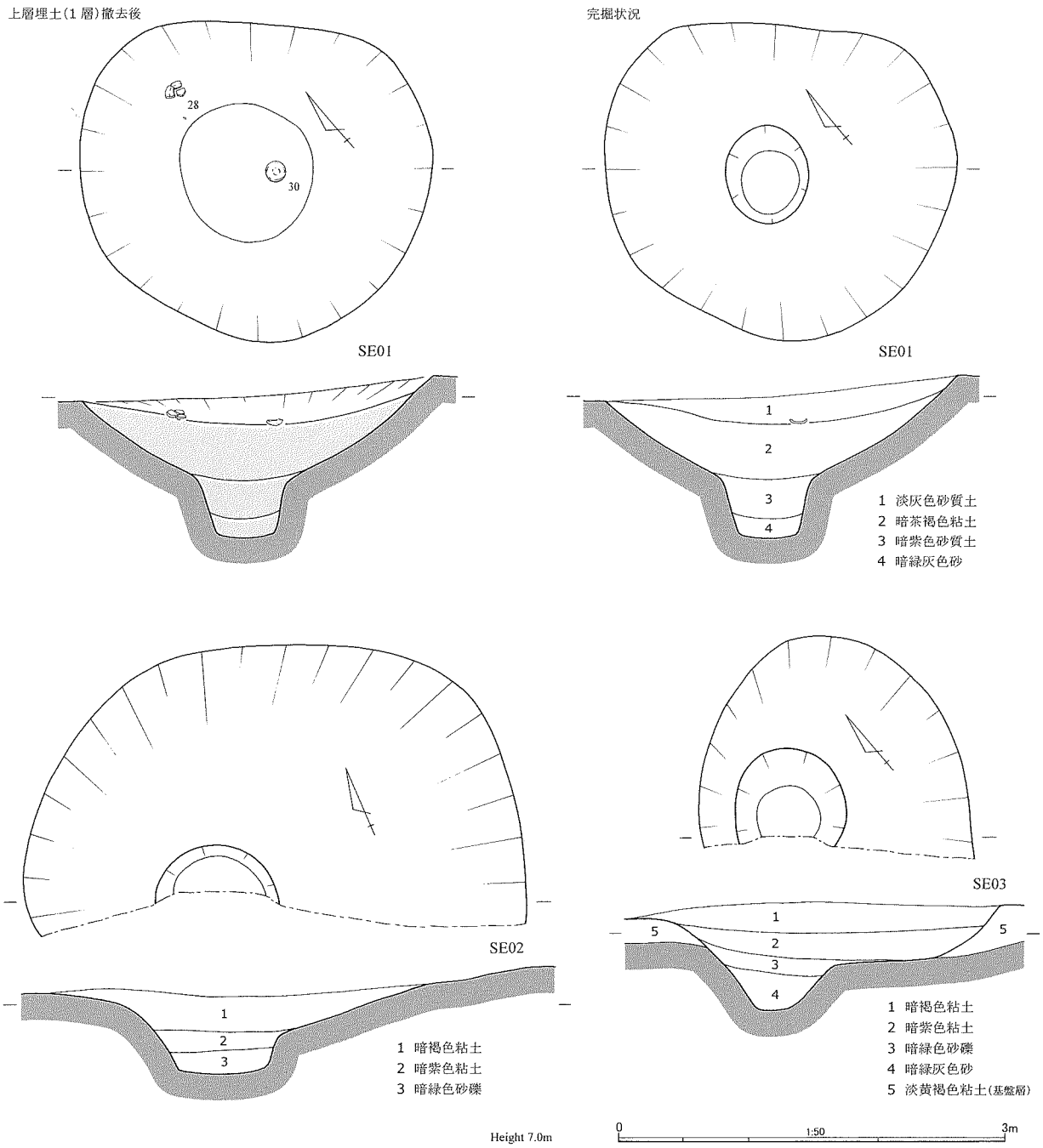


Fig.8　井戸（SE01～03）実測図

2　出土遺物

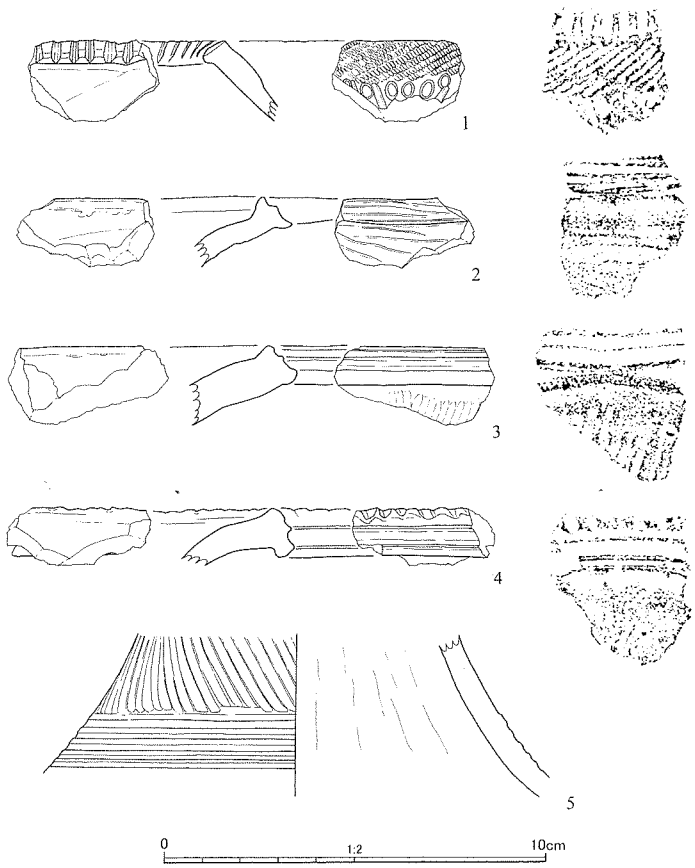


Fig.9　弥生土器実測図

弥生土器　(Fig.9)　SB01およびSB02の埋土中から、弥生時代中期の土器片が出土した。

弥生土器の混入は発掘調査終了後に確認したものであり、現地調査では弥生時代の遺構についての認識は全くなかった。古代の遺構群の下層に弥生時代中期の遺構が存在する可能性は充分考えられる。

1は壷の口縁と推定できるが、本来の形態は不明である。水平に図示したが、波状口縁である可能性もある。外面には縄文と竹管文が、内傾する端部には刺突がみられる。2～4は鉢もしくは壷の口縁である。口縁端部を含め条痕仕上げである。4の上面端部には細かい刺突が認められる。5は壷の肩部模様帯の破片である。

2～5は、弥生時代中期前葉の丸子式土器である。1の土器は特異な存在であるが、他の破片と焼成状態や胎土などが酷似することから、同時代のものと考えたい[1)]。

SE01出土遺物　(Fig.10)　SE01から出土した遺物の時期は奈良時代から平安時代まで認められ、時間幅が大きい。6～23までの土師器や須恵器は混入品と評価できる。出土遺物には灰釉陶器もみられるが、SE01の時期を示すものは28･29といった12世紀中葉から後葉の山茶碗･山皿と捉えられる。

30はSE01の廃絶段階で用いられたかわらけである。口径9.6cmを測る小型の個体であるが、器壁は厚い。底部はナデ仕上げであり、口縁端部にヨコナデが施されるなど、比較的丁寧なつくりといえる。共伴する遺物に13世紀代の遺物がみられないことは注目できるが、30の細かな時期の認定に対しては問題がある。西遠江におけるかわらけの出現時期にかんしては、資料的に少なく不明な点が多い。30が12世紀に溯る可能性はあるが、資料的な制約が大きい現状では、その評価については慎重にならざるをえない。

---

1) Fig.9-1に示した破片の時期が縄文時代中期に溯る可能性を向坂鋼二氏から指摘された。しかし、天竜川低地において縄文時代の様相は不明瞭な現状をふまえると、本例のような断片的な資料の評価には慎重にならざるをえない。

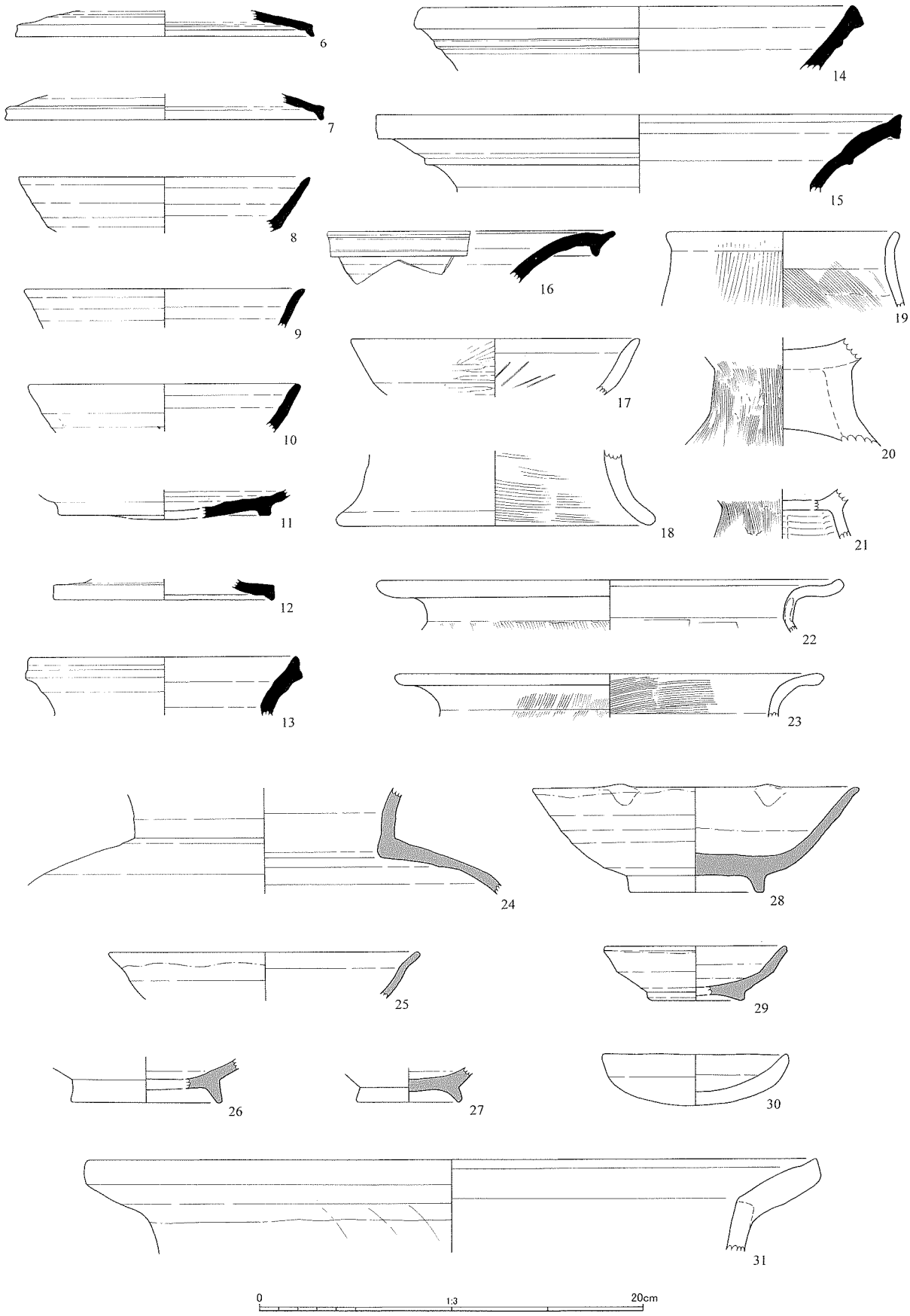


Fig.10　SE01出土遺物

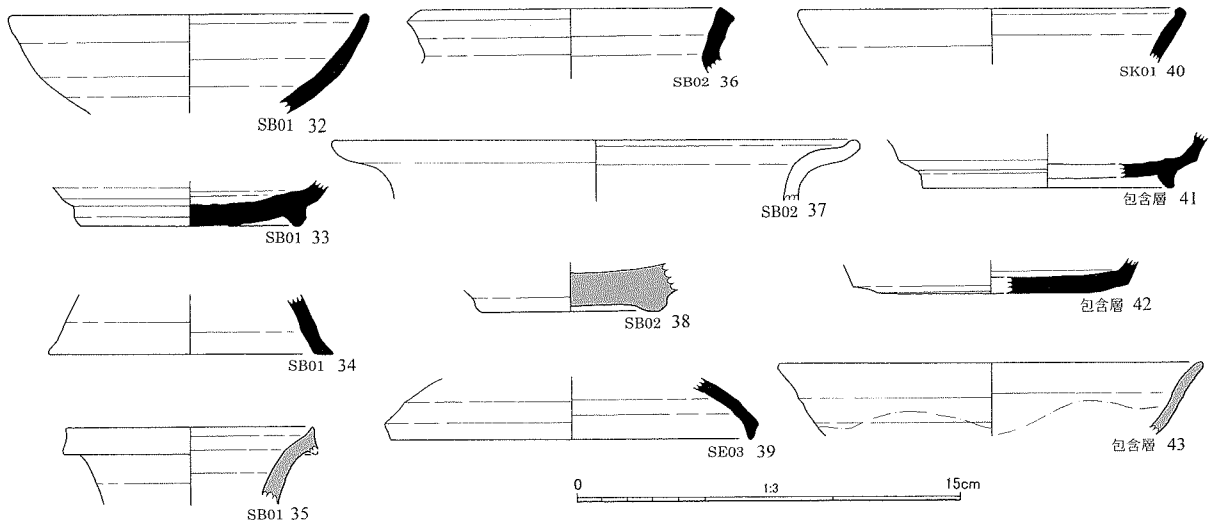


Fig.11　出土遺物実測図

その他の出土遺物　(Fig.11)　SE01を除くと、遺構内から出土した遺物は少ない。32～35はSB01から出土した。32の位置づけが難しいが、灰釉陶器の形態を模倣した須恵器の可能性が考えられ、SB01の時期を9世紀頃と推定しておく。

36～38はSB02から出土した。38は13世紀後葉の山茶碗である。今回の調査で出土した遺物の中で最も新しい段階のものである。

39はSE03から、40はSK14から出土した須恵器である。いずれも小破片であり、遺構の時期を明確に示すものとはいえない。

41～43は遺物包含層（暗茶褐色粘土層、2層）から出土した遺物である。遺物包含層からは比較的遺存部分が大きい土器が出土しており、当時の生活面が含まれていることがうかがえる。包含層から出土した遺物の時期は、検出した遺構の時期と重なる。

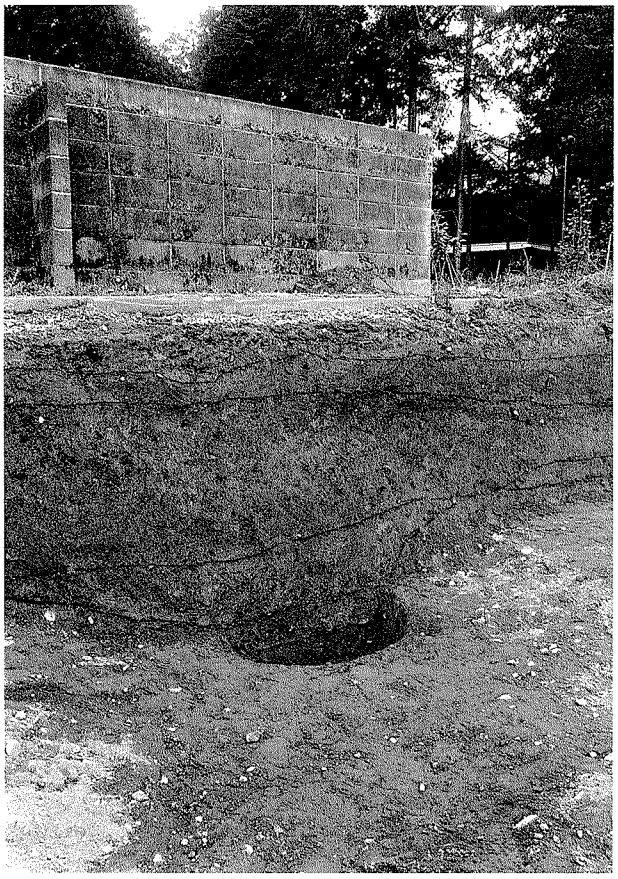
3　まとめ

遺跡の内容　今回の調査で、天王町村東遺跡には、奈良時代（8世紀）から平安時代（12世紀）にかけての集落が埋没していることが明らかになった。検出遺構は竪穴建物や井戸であるが、おそらく掘立柱建物などを交えた集落景観であったと推定できる。注目できる調査成果として、井戸の1基（SE01）から出土した遺物群があげられる。Fig.10-30に示したかわらけは、西遠江における再古段階の特徴を示す個体として特筆される。

また、僅かながらも弥生時代中期前葉（丸子式期）の土器片が出土した。天竜川平野における当該期の遺物として、初めての出土例である。天王低地には弥生時代中期の集落が埋没していると考えられる。天竜川平野への弥生文化の浸透過程をうかがう上で、長上地区での今後の調査にかかる期待は大きい。

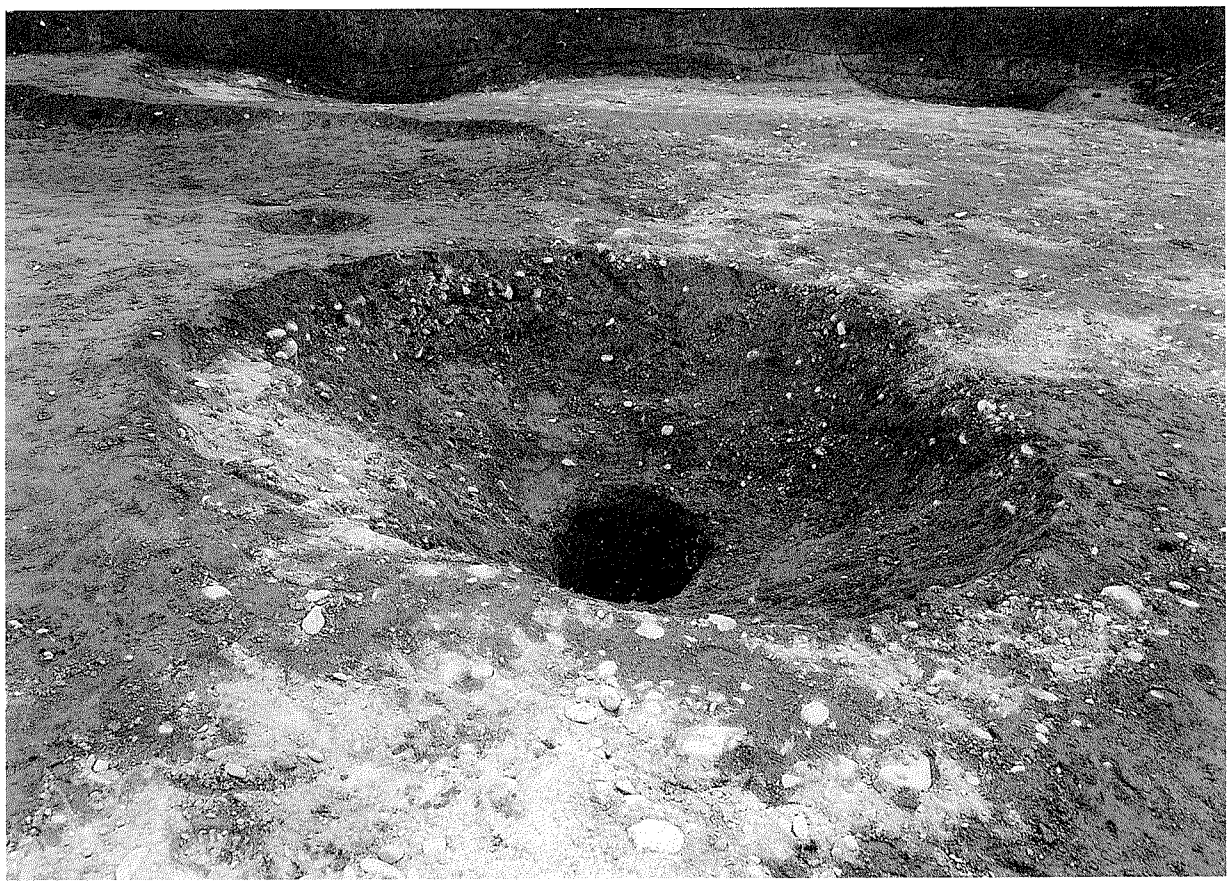
遺跡の広がり　天王町村東遺跡の中心は、調査地区よりも東側の自然堤防上にあると推定できる。また、西側の天王低地にむけても、広範に遺構が展開している可能性が高い。今後は南接する天王中野遺跡を含め、一連の遺跡群として捉える視点も求められよう。

1　調査地区全景（北西から）

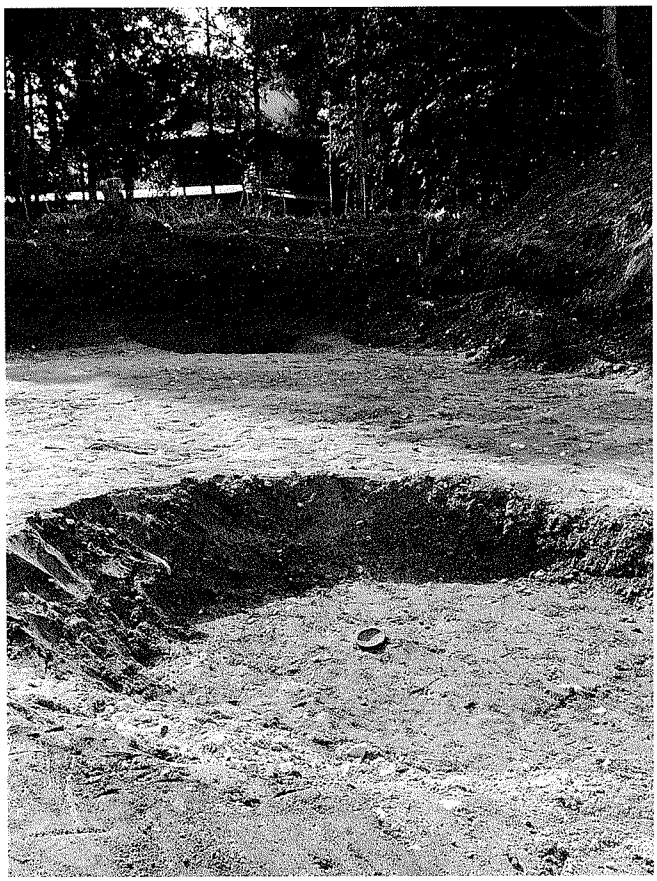


2　SE02（北東から）

3　SE03（北東から）

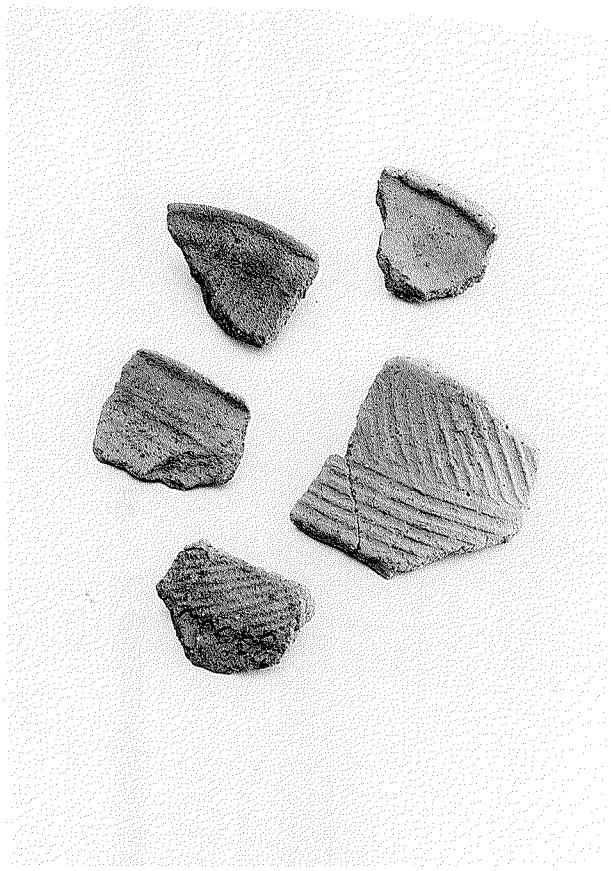


1　SE01（北東から）

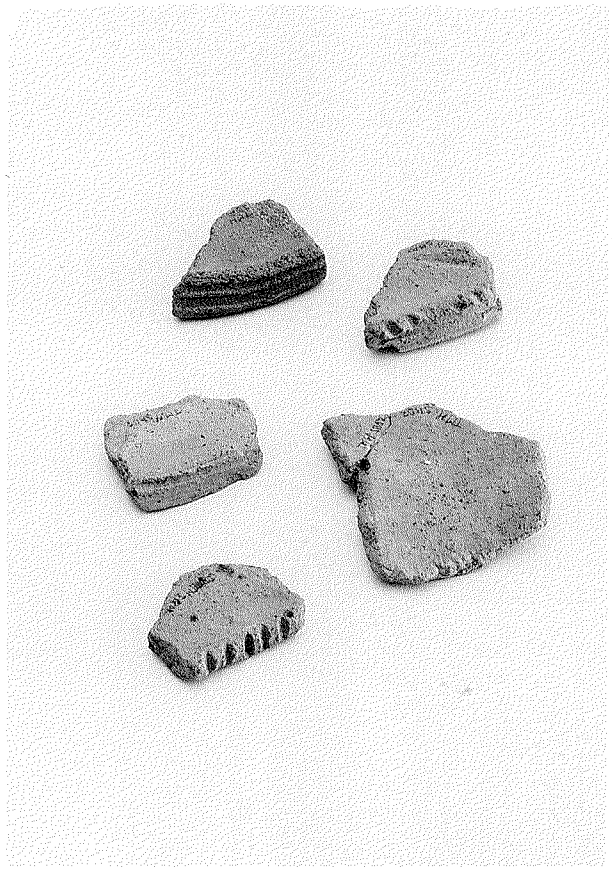


2　SE01 かわらけ（30）出土状況

3　SE01 山茶碗（28）出土状況



1　弥生土器（表面）



2　弥生土器（裏面）

3　SE01 出土遺物（表側）　28～30

4　SE01 出土遺物（裏側）　28～30

報告書抄録

書名（ふりがな）	天王町村東遺跡　(てんのうちょうむらひがしいせき)
編著者名	鈴木一有
編集機関	浜松市博物館 静岡県浜松市蜆塚4丁目22-1　TEL(053)456-2208
発行機関	財団法人　浜松市文化協会 静岡県浜松市早馬2-1　TEL(053)453-5234
発行年月日	2002年3月26日

ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんのうちょう むらひがしいせき 天王町村東遺跡	静岡県 浜松市 天王町	22202	14-7	34度 44分 05秒	137度 46分 28秒	2002年 1月29日 ～ 1月31日	170m²	事業所新築 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天王町村東遺跡	集落	弥生時代中期		弥生土器	中期前葉（丸子式期）の集落か
		奈良時代 ～ 平安時代	竪穴住居 井戸	須恵器・土師器 灰釉陶器 かわらけ	井戸廃絶時の儀礼にかわらけを使用

天王町村東遺跡

－浜松市 天王町村東遺跡　第１次発掘調査報告書－

2002年3月26日　発行

編集機関　浜松市博物館

〒430-8018　静岡県浜松市蜆塚4丁目22-1

TEL（053）456-2208　FAX（053）456-2275

発行機関　（財）浜松市文化協会

印刷　中部印刷株式会社

Tennōchō Murahigashi Site

The 1st excavation report

A Report of Archaeological Investigations on 9th – 11th Century Village in Western Shizuoka Prefecture, Japan

Hamamatsu Historical Museum

Shijimizuka 4-22-1 Hamamatsu City

Shizuoka Prefecture , Japan j-432-8018

March, 2002

The Association for Cultural Creation, Hamamatsu City